

編集にあたって 姜尚中

巻頭言 村田雄二郎

凡例

第1章

琉球王国の新時代

前田舟子

はじめに

003

羽地朝秀 (二六一七～七五)

005

現存しない家譜と複数の名前／琉球最初の正史『中山世鑑』／撰政羽地朝秀と「北谷・恵祖事件」
／儒教イデオロギーとしての「羽地路線」／この私と闘う覚悟をもって

程順則 (二六六三～一七三四)

015

蔡温 (二六八二～一七六一)

020

徐葆光 (二六七一～一七二三)

027

第2章

江戸時代の日朝関係とその変容

木村直也

対馬の動向を中心に

はじめに

034

雨森芳洲 (二六六八～一七五五)

037

江戸時代の日朝通交を支えた人物／学問修業と対馬藩への仕官／藩政業務に本格的に携わる／
朝鮮通交に関する業務と朝鮮語学習／憂愁のなかでの勤務／正徳信使における新井白石との論
争／長期の江戸勤務／享保信使と申維翰との交流／密貿易事件と朝鮮方佐役辞任／御用人の業
務と朝鮮語通詞の養成／『交隣提醒』における「誠信之交」／裁判としての倭館派遣／子息たちの
活躍と芳洲の隠居／晩年の芳洲／矛盾をふまえながら

新井白石 (二六五七～一七二五)

067

松平定信 (二七五八～一八二九)

070

大島友之允 (二八二六～八二)

072

西郷隆盛 (二八二七～七七)

076

その他の人物

柳川調信／惟政（松雲大師）／呂祐吉／宗義成／柳川調興／申維翰／玄徳潤／
満山雷夏／小田幾五郎／林子平／佐藤信淵／吉田松陰／山田方谷／勝海舟／
板倉勝静／徳川慶喜／木戸孝允／宗義達／大院君（李昰応）

079

第3章

江戸時代中期 天下太平の統治

深井雅海
高田綾子

はじめに

091

徳川綱吉（二六四六～一七〇九）

094

將軍就任と家臣の幕臣化／大名の改易・減封／農政への熱意と代官の処罰／大量処罰の政治性／
側用人政治／幕府財政の窮乏と貨幣改鑄

徳川吉宗（二六八四～一七五二）

102

経歴と將軍就任／紀伊藩士の幕臣化と御側御用取次の新設／情報の収集／勘定所の改革と人材
登用／新田開発と年貢増徴策

田沼意次（二七一九～八八）

112

紀州系幕臣の二代目／「表」と「奥」の両方を支配する／田沼時代の期間／前期の経済政策／後期
の経済政策

柳沢吉保（二六五八～一七二四）

117

徳川家宣（二六六二～一七二二）

119

徳川家継（二七〇九～一六）

121

間部詮房（二六六六～一七二〇）

122

新井白石（二六五七～一七二五）

124

松平定信（二七五八～一八二九）

127

その他の人物

129

堀田正俊／牧野成貞／荻原重秀／有馬氏倫／加納久通／大岡忠相／
井沢弥惣兵衛／石谷清昌／松本秀持／井原西鶴／竹本義太夫／
近松門左衛門／松尾芭蕉

第4章

徂徠学の成立と後世への影響

平石直昭

はじめに

138

荻生徂徠（二六六～一七二八）

- 一、近世日本社会の特徴
- 二、荻生徂徠の生涯（一）幼少期（二六六〔寛文六〕～七九〔延宝七〕）／幼い徂徠の関心と学問修行／（二）千葉在任期（一六七九〔延宝七〕～九〇〔元禄三〕）／漢文読解法の考案と学問・思想の進歩／船頭給と岩和田／（三）舌耕時代（一六九〇〔元禄三〕～九六〔元禄九〕）／学問・思想の形成／（四）藩邸居住時代（一六九六〔元禄九〕～一七〇九〔宝永六〕）／網吉の学問相手と近習への学問指南／文事関係の仕事／唐音学習の経過／隠密御用について／（五）町宅住まい時代（一七〇九〔宝永六〕～二八〔享保一三〕）／古文辞研究の過程と護園の成立／著述の公刊と交遊の広がり／新儒学説への転回、政策の上申、死去
- 三、荻生徂徠の儒学説と経世策 古文辞学の成立とその背景／基礎概念の再定義と天の超越化／聖人の「窮理尽性」と「道」の制作／自然・文明・鬼神／「格物致知」論／徂徠の経世策

140

伊藤仁斎（二六二七～一七〇五）

伊藤東涯（二六七〇～一七三六）

安藤昌益（二七〇三～六二）

富永仲基（二七一五～四六）

本居宣長（二七三〇～一八〇二）

蘭学者

その他の人物

服部南郭／太宰春台／石田梅岩／海保青陵

192

190

186

184

181

178

175

第5章 朝鮮実学

川原秀城

はじめに

207

李瀼（二六八一～一七六四）

- 一、強い道統意識と異端研究の併存
- 二、星湖西学の概要
- 三、李瀼の四端七情論 アリストテレスのアニマ論の影響／西欧医学の脳囊論の影響
- 四、中西会通と西学の理論的優位 “天動”説／“地円”説／西学優位の主張
- 五、李瀼の社会改革論
- 六、星湖学派

215

洪大容（一七三二～一八三三）

- 一、洪大容小伝
- 二、燕行と思想革命 洪大容と朱子学／思想革命／筆談Ⅰ／筆談Ⅱ／筆談Ⅲ／燕行後の朱子学批判
- 三、洪大容の基本思想 実学／北学／以天視物
- 四、価値相対主義と西学知識 地球説とティコの宇宙体系／価値相対主義的社会理想と天地の相対性
- 五、北学派

232

宋時烈 (二六〇七～八九)	248
尹鑄 (二六一七～八〇)	254
朴趾源 (二七三七～一八〇五)	257
丁若鏞 (二七六二～一八三六)	259
崔漢綺 (二八〇三～七七)	263
李濟馬 (二八三七～一九〇〇)	265

その他の人物

権尚夏／韓元震／李東／柳馨遠／安鼎福／黃胤錫／徐浩修／朴齊家／金正喜／金正浩

267

第6章

比類なき盛世の果てに——清朝全盛期

谷井陽子

はじめに

280

乾隆帝 (二七二一～九九)

283

- 一、英主の登場
- 二、国家全盛の時

- 三、知的世界の帝王
- 四、停滞と自足

雍正帝 (二六七八～一七三五)

309

ジュンガル

314

鄂爾泰 (二六八〇～一七四五)／張廷玉 (二六七二～一七五五)

317

白蓮教徒

320

マカートニー (二七三七～一八〇六)

323

曹雪芹 (二七一五／二四～一七六三／六四)

326

揚州八怪

329

その他の人物

332

袁枚／紀昀／陳宏謀／和珅

第7章

タイソンの乱を経て ベトナムの南北統一へ

多賀良寛
今井昭夫
川口洋史
北川香子

はじめに

337

阮惠（二七五三〜九二）

家族と故郷／タイソン反乱の勃発／南方での戦い／北方への進撃／兄との確執／昇龍の動揺と
黎朝の旧臣たち／清朝との決戦／光中帝（阮惠）の統治／さらなる野望と突然の死／逆賊から民
族英雄へ

阮福暎（二七六二〜一八二〇）

生き残った王子／シャムへの亡命／嘉定の回復／阮福暎勢力の特徴／外国人からみた阮福暎／
タイソンへの反攻とベトナムの統一／皇帝としての統治／死去と後世の評価

ピニョー・ド・ベエヌ（二七四一〜九九）

明命帝（二七九一〜一八四二）

阮攸（二七六五〜一八二〇）

その他の人物

ラーマ一世／アン・エーン／アン・チャン／アン・ドウオン

第8章

イギリスを脅かした
一八世紀南インドの地域政権

太田信宏

はじめに

ハイダル・アリー（二七二〇頃〜八二）

- 一、前半生（二七二〇頃〜四六） 公認の伝記がないハイダル・アリー／父母と祖先／父との別れ
- 二、マイソール王国の軍人として（一七四六〜六二） 最初の一步／二つの継承戦争／軍資金を
手にする／運命の地ティルチラーパットルへ／泥沼化する攻防戦／デインドウガルへ／王国に迫
る破綻の危機／王都ジュリーランガパッタナへ／腹心の裏切り
- 三、王国の支配者として（一七六一〜八二） マイソール王国周辺の諸勢力／征服戦争と立ちは
だかるマラーターの壁／イギリスとの全面対決／再び立ちはだかるマラーターの壁／父子の確
執／征服戦争の再開／権勢の絶頂へ／イギリスとの最後の戦い／最期
- 四、ハイダル・アリーの政治的・軍事的手腕 ハイダルは革新的だったのか／ハイダル以前のマ
イソール王国／ハイダルのもとでの変化／恐怖政治／軍事の天才か／ハイダルの人物像

ティプ・スルターン（二七五〇〜九九）

マーダヴ・ラーオ（二七四五〜七二）

ウォレン・ヘースティンズ（二七三二〜一八一八）

その他の人物

ムラーリ・ラーオ・ゴールパデー／

ムハンマド・アリー・ハーン・ワーラージャー／

チャンダー・サーヒブ／ナンジャ・ラージャ／プールナイヤ／

エロイ・ジョゼ・コレイア・ペイシヨット

インドにおけるイギリス統治時代の
近代化と伝統回帰

白田雅之

はじめに

446

ラームモーハン・ロイー (一七七四〜一八三三)

449

- 一、イギリス支配にたいするインド社会の反応 宗教・社会改革運動の位置づけ／ムスリム社会の改革運動／ヒンドゥー社会のイギリス支配への対応
 二、ラームモーハン・ロイーとその時代 第一期一七七四〜九七年世に出るまでの時期／第二期一七九七〜一八〇三年 カルカタで金融業を営んだ時期／第三期一八〇三〜一五年 東インド会社に関わり、ベンガル各地で勤務した時期／第四期一八一五〜三〇年 カルカタ定住期／ヒンドゥー教批判／キリスト教との対話／ヒンドゥー教の改革／サティー禁止運動／ブラフモ・サバー／ジャーナリズム・教育・政治／ジャーナリズム／教育／政治／第五期一八三〇〜三三年 イギリス滞在期／ムガル皇帝の使節／インドの実情とその改革案の提示／近代化と伝統回帰
 三、近代初期(一九世紀後半)の宗教・社会改革運動

ケーシャブチャンドラ・セーン (一八三八〜八四)

490

ラーマクリシュナ (一八三六〜八六)

492

ヴィヴェーカーナンダ (一八六三〜一九〇二)

494

ダヤーナンド・サラスワティー (一八二四〜八三)

495

サイイド・アフマド・ハーン (一八二七〜九八)

497

その他の人物

499

ウイリアム・ジョーンズ／マックス・ミュラー／ベンティンク／
 マコーリ／ドウォールカーナート・タゴール／デロジオ／
 ラーダーカーント・デーブ／デーヴェーンドラナート・タゴール／
 イーシュワルチャンドラ・ヴィデイヤールサーガル／
 バール・ガンガダル・シャーストリ・ザンベール／
 マハーデーヴ・ゴーヴィンド・ラーナデー／パンディター・ラマーバーイー／
 ヘレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキー／ヘンリー・ステイール・オルコット／
 シヤー・ワリーウッラー／シヤー・アブドウル・アジーズ／
 サイイド・アフマド・バレールヴィー／ヴィーラサリンガム

近代オスマン帝国の改革実践者

佐々木紳

はじめに

510

ミドハト・パシヤ (一八三二〜八四)

514

- 一、タンズイマートの時代（一八三九〜七六） 二人のアフメト／トウナ州知事時代／国家評議会と最高法院／バグダード州知事時代／行き詰まるタンズイマート
- 二、転換点としての一八七六年 アブデュルアズィズの廃位／オスマン憲政の成立／国外追放と帰参
- 三、結集点としての一八八一年 帝都に集う人びと／ユルドウス裁判／流刑と死去

ジエヴデト・パシヤ（一八二三〜九五）

アフメト・ミドハト（一八四四〜一九二二）

アブデュルハミト二世（一八四二〜一九一八）

その他の人物

セリム三世／マフムト二世／アブデュルメジト／アブデュルアズィズ／

アーリー・パシヤ／イブラヒム・シナースイー／ナムク・ケマル／

ファト・パシヤ／マフムト・ネディム・パシヤ／ムスタファ・レシト・パシヤ／

アリ・ハイダル・ミドハト／シェフリバン／ファトマ・アリエ

中央アジアの一九世紀——近代の開幕

小松久男

はじめに

ケネサル（一八〇二〜四七）／ワリハノフ（一八三五〜六五）／

ターイブ（一八三〇〜一九〇五）／ダーニシユ（一八二七〜九七）／

ガスプリンスキー（一八五二〜一九二四）／

ドウクチ・イシャーン（一八五三〜九八）

- 一、チンギス・カンの末裔たち ケネサル——独立不羈の草原の英雄／ワリハノフ——天逝した草原の英才／グレートゲームのなかで

- 二、中央アジアの風雲 タシュケント陥落／ターイブ——激動の時代の証人／ヤークーブ・ベグ政権のもとで

- 三、ブハラ の命運 ダーニシユ——聖都の知恵者／ブハラのアミールとダーニシユ／column 西徳二郎のトルキスタン探訪／トルクメンの抵抗戦／ダーニシユ最後の献策

- 四、ロシアのイスラーム ガスプリンスキー——改革運動の先駆者／ガスプリンスキーとブハラ、イスラーム世界／column 草原の知識人——アルトゥンサリンとアバイ

- 五、アンディジャン蜂起の衝撃 ドウクチ・イシャーン——聖戦に立った導師／ターイブのドウクチ・イシャーン批判——「無知なスーフィーたち」の暴挙／中央アジア大変革の時代へ

その他の人物

シャブダン・ジャンタイ／フダーヤール・ハン／

ジャマルッディーン・アフガーニー／アタウツラー・バヤジトフ／

アフメト・バイトウルスノフ／サドリッディン・アイニー／

ニコライ・イグナチエフ／アレクセイ・クロパトキン／ウラディミール・ナリフキン

周縁から見る中国 近代の幕開け

倉田明子

はじめに……

容閔（二八二八～一九二二）……

- 一、幼少期～アメリカ留学
- 二、帰国～仲買人時代
- 三、曾國藩の幕僚～留学事業
- 四、清朝への最後の提言～晩年

洪秀全（二八一四～六四）……

洪仁玕（二八三二～六四）……

曾國藩（二八一～七二）……

李鴻章（二八三三～一九〇一）……

その他の人物……

唐紹儀／陳蘭彬／黃勝／林則徐／魏源／サミュエル・ブラウン／
ロバート・モリソン／カール・ギュツラフ／メドハースト／ジェームズ・レッジ／
ブリッジマン／王韜／唐廷樞／恭親王奕訢／バーリンゲーム

678

672

668

667

662

「悪女」と「権臣」がもたらした
王朝政治の終焉

村田雄二郎

はじめに……

西太后（二八三五～一九〇八）……

稀代の悪女か有能な改革者か？／一八歳で宮中に／辛酉政変／同治中興——督撫重権／光緒帝
親政と頤和園改修／戊戌変法／変法の挫折と三度目の垂簾聴政／己亥建儲の風波／義和団戦争
から新政へ／洋風の導入／予備立憲、そして二人の死

692

690

袁世凱（二八五九～一九一六）……

生い立ち／朝鮮駐在／戊戌政変の密告劇？／義和団弾圧と科挙廃止／失脚、復権から辛亥革命へ
／民国の大總統として／ストロングマンの終焉

716

康有為（二八五八～一九二七）……

梁啓超（二八七三～一九二九）……

光緒帝（二八七一～一九〇八）……

溥儀（二九〇六～六七）……

738

736

733

730

執筆者一覧

写真提供・図版出典

凡例

- ・本書の構成は、章ごとにまず中心となる人物について述べ、次いで当該人物を取り巻く重要な人物について、さらに関連する人物について、項目を立てて述べている。ただし、例外的にこの構成を採らない章もある。
- ・本文中、その章で項目を立てた人物名等の初出に「▼」を付した。
- ・漢字表記については原則として常用漢字を用いた。
- ・人名および地名等のカタカナ表記については、平凡社の《エリア事典》シリーズ、岩波書店の『岩波イスラーム辞典』『古代オリエント事典』、その他の各種事典類を参照しつつ適宜検討し、採用した。
- ・ふりがなについては例外を除き、中国の人名および地名等については日本語の音読みによるひらがな表記、その他の漢字圏の人名および地名等については基本的に現地音によるカタカナ表記で付した。
- ・外国語文献の日本語訳については、特に断りのないものは執筆者による。また、日本の古典籍等については執筆者により適宜読みやすく整理した場合がある。
- ・引用文中の執筆者の補注については原則として「」を使用した。
- ・年代は原則として西暦（新暦）表記とした。月日については、西暦採用以前の東アジア地域では旧暦のままとした章もあるが、それ以外の地域については、特に断りのないものは西暦表記とした。
- ・イスラーム圏におけるヒジュラ暦等、西暦への換算にあたって二年にまたがる場合、原則として下一桁を「／」でつなぎ表記した（「一四〇〇／一年」等）。
- ・人物の「満年齢／数え年」については執筆者の表記を尊重した。